



2018 年 (平成 30 年)

11月号 (No. 882)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

アルプスのクライミングを満喫してきた 毎夏恒例の「シャモニの休日」

ヨーロッパ・アルプスを語れる日本人の第一人者、近藤等先生の導きによって、憧れのアルプス登山の洗礼を受けた飯田年穂会員(明治大学教授)は、「四十の手習い」でクライミングを始め、一気に傾倒していった。爾来27年、毎年、夏休み恒例となっているモン・ブラン山麓、シャモニですぐす「雪と岩の日々」や、最近のアルプスでの話題を綴っていただいた。

飯田年穂

近藤等先生に後押しされ 「雪と岩の世界」へ

フランス・アルプスの中心地、シャモニを訪れるようになって27年になる。大学の教員をしていてサバティカル・イヤー(長期有給休暇)の機会を与えられたのをきっかけに、ヨーロッパ・アルプスを登ってみたいと思ったのが始まりだった。日頃から親しくしていただいていた

近藤等先生(本会名誉会員、2015年逝去。私にとっては山のみならずいろいろな意味で教えを受けたので、やはり「先生」と書きたい)に、アルプス登山についての相談に伺った。まずは、本格的な登山経験のない私のような者に、そもそもアルプスを登ることが可能なのか。

「君、大丈夫だよ」と、先生はいと

目次

アルプスのクライミングを満喫してきた 毎夏恒例の「シャモニの休日」……	1
理事の定年と再任制限の再検討に関する報告……	4
視覚障害者登山全国交流大会を高尾山で開催……	5
全国支部合同会議を開催 会員増強 と安全登山への体制強化を目指す……	6
来年は還暦を迎える木暮祭……	7
新宿御苑で「青いケシの世界」写真展を開催……	8
高尾の森づくりの会と河西瑛一郎さん……	10
東西南北……	12
活動報告 山行委員会……	13
支部だより 東九州支部……	14
新入会員……	14
図書紹介……	15
図書受入報告……	17
会務報告……	18
ルーム日誌……	18
会員異動……	19
INFORMATION ……	19
編集後記……	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……10～20時
水・金……13～20時
第2、第4土曜日……閉室
第1、第3、第5土曜日……10～18時

も簡単に答えられた。ただし、その前に最低限の技術をちゃんと身に付けておくことが条件だ、と指摘された。そのためには登山教室に入るのがいいだろうということ。で、クライミングとアイゼン・ピツケルの技術指導を受けるために登山教室に通い始めたのだった。現地に行つてからも、先生の紹介でアンセルム・ボーやアラン・ルブレイヤンといった優秀なガイドと知り合いになり、アルプス登山の手ほどきを受けることができた。

40をとうに過ぎた身でアルプスを登りたくなったのは、なんと言つても、あの岩と氷の峻厳な山容に憧れたからにほかなるまい。当時の私にはほとんど不可能とも思える挑戦だったが、憧れの方が強かった。さらに、実際に始めてみ

ると、少しずつではあれ自分の限界を乗り越えていく達成感は何ものにも代えられない経験となつたし、アルプスという《プレイ・グラウンド》に展開する、まさに下界とは隔絶した異世界の美しさは、かけがえない魅力であった。以来、毎年の夏休みを利用してシャモニに通いつめている。

登るのはクラシック・ルートが中心だ。近藤先生が訳したガストン・レビュファの『モン・ブラン山群―特選100コース』(1974年)は、それこそアルプス版『百名山』でもなかるうが、およそ無数にあるといつてよいモン・ブラン山群のルートの中から選び抜かれたピークとコースの解説で、トポ的な案内としての必要な情報を得ることはもちろんだが、登攀を巡る多

様な楽しみ方やその歴史までが豊かに語られていて、出版から40年以上たった今でも、ページを開く楽しみは尽きない。

難易度が変われど尽きない魅力

それとともに、この本の出版から現在に至るクライミング事情の著しい変化には驚いてしまう。例えば、エギーユ・デュ・ミディの南壁。1956年にレビュファがチ

エリストのモリス・バケと一緒に初登攀した。『100コース』の解説では「非常に難しい」山行にランク付けされていて、コースタイムは「3〜5時間」。この時代は、もちろんまだ革の登山靴で登っている。核心部のS字クラックの通過では、A1のエイドのステップも入っているが、試登の段階ではうまくいかなかったこの箇所を、そのころ出回るようになった拡張式ボルトの助けを借りてようやく登り切ったのだった。

しかし、現在はどうだろう。この《レビュファ・ルート》は超人気で、シーズン中は順番待ちのありさまだ。それもそのはず、フリーで6a max。ミディのロープウェイ駅から至近の所だからアクセスが

気楽、私でさえ駅をスタートしてから、クライミングを含めて2時間あれば元の駅に戻ってこられる。要するに、クライミングの技術とギアの改良によって易しくなっていました。さらには、この間に新しいルートが次々とできて手元にあるトポでちよつと数えただけでも、いつそう難度の高いルートが20本も引かれているという次第なのだ。

だが、易しくなったことによってこのルートの価値が下がったと言つてよいだろうか。レビュファは「このスラブの真只中にあることだけでも楽しみだ。花崗岩の岩粒、色彩、このスラブ独特の形とふんいきがある」と言う。「登攀そのものは、美しい動作と、柔軟なバランスを連続して組み合わせた独特の風格のあるもの」なのだ。だからこそ、我々は完璧なクライミングを目指そうとする。それは、こうしたルートの場合には、うまく登ることそのものが「眼下のパレー・ブランシュ、頭上の空、西のモン・ブラン、東のグランド・ジョラスといった並はずれた風光、それと花崗岩と一体になる」（以上、すべて近藤等訳）ことなのだからだ。そ

れをやり遂げたとの喜びは、難易度によって価値が左右されるようなものではない。

活発な新ルートの開拓

もう一つ気になることがある。それは氷河の変化だ。言

うまでもなく、気候変動の影響なのだが、ここ数年の変化はまさしく恐ろしいほどになっている。観光スポーツとして有名なモンタンヴェールでは、メール・ド・グラス氷河の高さを年度ごとに表示するプレートが設置されているが、ここ20〜30年で100m以上も低くなっていることが分かる。写真の上の方の木の生えている所まで、かつては水が届いていたのだ。溶解の規模は、まさに危機感を覚えるほどだ。

そんな状況のなかで、むき出しになった岩壁が今、格好のクライミング・サイトになっている。氷河に削られた表面だから、当然ツルツルのスラブで、高度差も200〜300mは優にとれる。懸垂で



「赤い針峰群」プレヴァンのルートに登る筆者

氷河に下り立ちスタートするマルチ・ルートは、なかなか登りがいいがある。今年も真新しい（まだ、名前さえ付いていない）ルートを、早速一つ登ってみた。

新ルートの開拓は、モン・ブラン山群の全域で活発に行なわれている状況だ。特に、谷を挟んでモン・ブランの向かいになる《赤い針峰群》のエリアは、まさにスポーツ・クライミングのメイン・グラウンドになりつつある感がする。山岳文学作家フリゾン・ロッシュの名を冠したルートが開かれたのは、ちょうど2000年のことだったが、あつという間に人気の「クラシック」ルートになった。すぐ後に続いて次ができる。もう6本くらいはあるはずだ。ミディの40



メール・ド・グラス氷河に下りるための長大な階段

00m峰的なたまたまいとはひと味違って、天候や氷河の具合をあまり気にせずにすむ、もっと気軽に爽快なスポーツ・クライミングの醍醐味が、ここにはある。

小屋泊まりの本格的な高山山行が廃れるようなことはないけれど、1日や半日コースのクライミング登山行がずっと盛んになってきているように思える。それは、シャモニという地域の特性による面も大きいだろう。《針峰》という名前が象徴するようにモン・ブランの山域には、鋭角的にそそり立つ壮大な岩峰が所狭しと、しかも手近な所にそびえている。クライミングが意欲をそそらないはずはない。こ

れは、ほかのグリンデルワルトやツエルマットにはない、とりわけクライミングに恵まれた環境なのだ。とは言え、岩場がルートだらけになってしまったら、環境負荷という点では大丈夫なのか、そのあたりのことがいささか気にならない。今のところそれが問題になっているという話は聞かれない。むしろ、アルプスでは全体として、貴重な恵みとしての自然環境に対する意識は、充分共有されているように見受けられる。

モン・ブランに登山規制

過剰な環境負荷という点に関連しては、モン・ブラン登山で注目す



富士吉田公園にある姉妹都市の記念プレート(右)

べきことがあった。日本でも話題になったが、ついに地元のアール・サヴォワ県当局はモン・ブランの登山規制を実施した。この夏のハイシーズンの間、いわゆる「ロイヤル・ルート」になっているグレート小屋経由のルート利用者に対して、あらかじめルート上の山小屋の宿泊予約をしている登山者に限り、というものだ。さらに来年からは、登山者数そのものを214人に制限する措置がとられることも発表されている。

実際、山小屋の収容能力を超える登山者が押し掛け、それが事故の増加につながっている。温暖化の影響によって氷雪の溶解が進み、山の岩塊の構成要素となっている永久凍土までもが溶け出すという環境悪化が起きていて、その結果、落石や崩壊の危険が高まっている。実際、そういった原因での死亡事故が頻発している。にもかかわらず、過剰な登山者の中には、装備や経験の不足など無謀な者も含まれていて、登山者を制限することによって安全指導を強化していく意図もある。かつ登山者数の減は、当然、環境負荷の低減にもつながっていくことになろう。

最後に、今年はまだ一つ話題があった。シャモニ・富士吉田姉妹都市の40周年記念だ。2つの町は、それぞれモン・ブランと富士山という最高峰の麓にあるという縁で1978年に姉妹都市となった。去る5月30日、シャモニに両市の関係者が集まり、日本外務省からも出席を得て、記念のセレモニーが催された。その際には、記念のプレート(写真の右)も設置された。場所は富士吉田公園(Jardins de Fuji-Yoshida)。モン・ブランと対面するすばらしいロケーションにある。

プレートに刻まれた言葉は、この姉妹都市が「シャモニ観光局長ジャン・ブリソーと早稲田大学名誉教授でシャモニ名誉市民の近藤等両氏の尽力によって」実現したこと、そして、結びの所で「シャモニでは1999年、日本では2011年の異常な災害の折に幾歳月、双方で哀しみと喜びを分かちあったことを伝えている。日仏交流160年に当たるこの年、このような形で両国の交流の軌跡をたどり直してみたことは、それぞれの町に与えられた、山という自然の賜物を通して互いの結び付きの意義を確認する機会となったはずだ。

OPINION

理事の定年と再任制限の再検討に関する報告

公益法人運営委員 近藤雅幸

本会が公益社団法人の認定を受けるにあたって、定款施行細則で理事の定年（就任時に70歳以下であること）と再任回数（制限）（連続2回まで）を設けたことは、まだ記憶に新しい。

これを定めた定款施行細則が制定されたのは2012年のこと。それから6年がたち、その間に行なわれた3回の理事改選を通じてこの2つの制度は着実に定着してきたように思う。ただ、このようにある程度結果が出ているからこそ、もう一度理事の定年制と再任制限を検証して、制度をつくった当初からくすぶっている制度の是非を問う声に答える必要がある。

本委員会（公益法人運営委員会）では、前段の考えに基づきこの問題を議論してきた。

本会の理事に求められるものは何か。そこから出発して理事の定年制と再任制限を検証してみた。

理事に求められるもの

日本山岳会はボランティアによ

って運営され、成り立っている団体である。そのなかでは理事は無報酬で、なんの利権を得ることもなく、職務を行なわなくてはならない。このような組織は、理事全員に自発的な善意と熱意、団体のミッションへの傾倒と理解が求められる。さらに一人一人が違った考えを持った上での、理事会内での価値観の共有も必要である。

それに加えて、ミッションを達成するための資質（経営的思考、時代の変化に対応できる柔軟性など）と能力（事務的能力、専門的知識など）も求められてくる。

本会において、理事とは会員の代表でも名誉職でもなく、あくまでも無償で会のためにミッションを遂行する仕事人の集まりなのである。

したがって、理事にはなりたいた人がなるようなものではなく、会のミッションに照らして、なってもらいたい人がなるものなのである。ここには年齢層への配慮や平等の原則が入り込む余地はない。

理事の定年制

理事の定年制については、これまでいろいろな意見が交わされてきた。ただ、このことを議論するにはまず、前項で見てみた理事の要件に照らした上で定年制のメリットとデメリットを考えていく必要がある、理事定年制が施行されてから、実際の運用によってある程度明らかになったことがある。（メリット）

- ・理事会の新陳代謝が図れ、組織が活性化している。
- ・理事の年齢層が若くなり、時代の変化に対応できる柔軟性と創造性が担保できるようになっている。
- ・現役として山を登っている人が多く、登山者のニーズと登山の現状を体験として理解できている。
- ・理事がPCやITを使いこなせるため、時代に合った業務の効率化と即応化が図れている。
- ・会の透明化が図られている。
- ・これから組織を引き継いでいく若い世代の入会に対して適切な働き掛けや対応ができ、会の存続（規模の維持）と財政に対してより良い影響を与えることができる。

きている。

・権威的な風土が一掃され、平等性が担保できている。

・理事同士の世代が近いので、価値観が共有しやすくなっている。（デメリット）

- ・運営のノウハウの蓄積が深化していない。
- ・対外的な団体間の関係や人間関係がうまく引き継がれていない。
- ・現役のため、時間がとれない理事が多い。

今回は、検証を行なうなかで本会の事例だけではなく、ほかの公益法人の事例も研究してきた。具体的な事例紹介は避けるが、定年制を採用した公益法人の好転が如実に見てとれた。その結果からも、会のミッションをうまく達成するために、定年制によって理事の年齢層に制限を設ける方向性は間違っていないという確信を持てた。

本会が70歳定年制を採用してから、それによる不具合は特になかったと感じている。したがって、現行の定年制を変える必要はなく、今後も現状の制度を続けていくべきというのが本委員会における定年制検証の結論である。

理事再任の回数制限

次に再任回数の制限を設けた場合のメリット・デメリットから考えてみよう。

〈メリット〉

- ・新しい意見や考え方を持った理事が選出されるため、継続的に新しい視点が導入され、時代の変化に対応することができる。

- ・より多くの会員が理事を経験できるため、人材が育つ。

- ・役員の事実上の固定による会運営の硬直化を防ぐことができる。

〈デメリット〉

- ・最大連続2期4年というミッション遂行における任期が短い。

これらを考慮すると、本会が先を見据えて時代に対応し、継続していくためには、理事再任回数制限は必要との結論にたどり着く。

ただ、デメリットを緩和するための方策も必要である。再任の制限を行なう回数についての検討である。現状のまま再任は連続2期(4年)のままでいいのか。

特に1期では結果が出ない役職(会長)については、既存の理事から選出すると役職の任期が1期(2年)になってしまうため、既存の理事から選出することは難しい。

本委員会では理事の再任制限について、制度は必要との見解でまとまったが、会長の任期との兼ね合いがネックになって、制限を行なう再任回数については次のように意見が分かれた。

・現行のままで良い(再任制限は2期(4年)だが、2年休めばその後再び2期(4年)できるので問題はない)。

・理事の再任制限は連続3期にすべき。理事を1期務めた後、引き続きいて会長になる。

・会長だけ連続3期にする。会長も理事の一人なので、どのようにしてほかの理事と別の制度を適用するのか検討が必要。

結局、再任制限の回数については、引き続き検討と議論を続けていくことになった。

このたび本委員会で行なってきた検証の結果、理事定年制については現状のまま続けていくべきという結論が出た。理事再任回数制限についても現行を基本に、来年2月には会報「山」で発表できるようにしていきたい。

REPORT

視覚障害者全国交流登山大会を高尾山で開催

大橋基光

日本山岳会に後援していただいた視覚障害者全国交流登山大会は、10月7日に東京・八王子市の高尾山において開催されました。全国から集まった視覚障害者登山の10の支援団体約200名に加え、日本山岳会と高尾の森づくりの会の35名の支援ボランティアによって、全員で高尾山に登りました。

登山の当日は青空の下、10月には珍しい30度を超える高温になりましたが、大変多くの一般登山者に交じって全員無事、下山することができました。

視覚障害者の方には、前後に補助者が付き3人1組になります。さらに3組の先頭にリーダーが付き、その10名が3つ集まって班を構成します。つまり1つの班は30名前後になるのですが、その班に複数のボランティアが救護や連絡に当たるために付くことになりました。3つのコースに分かれて登りましたが、高尾山に登っている一般のハイカーとほとんど同じ速さでの歩きでした。

登山中に転ぶ視覚障害者の方は、おらず、我々暗眼者(視力のある人をこう呼ぶ)に負けない速さで歩きました。ボランティア参加者も初めての体験で、不安な部分もあったようですが、終わってみると、視覚障害者の方々と同様に楽しんでいただけたように思えます。用意された日本山岳会が企画した「山のお弁当」も、視覚障害者の方々から、とても美味しいと言っていただけでした。

視覚障害者全国交流登山大会は、2年ごとに開催地を変えて実施され、次は2020年に大分県で16回目の大会が開催されることに決まりました。主催団体からは、次回も日本山岳会の支援を要請されましたので、ご協力をよろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、この大会に、ボランティアとして参加された日本山岳会と高尾の森づくりの会の会員の皆様、また、募金にに応じていただいた会員の皆様に、篤くお礼を申し上げます。

REPORT

全国支部合同会議を開催 会員増強と安全登山への体制強化を目指す

総務担当常務理事 永田弘太郎・谷内剛

平成30年度支部合同会議を9月29日(土)～30日(日)、東京・四谷駅前の主婦会館プラザエフで開催した。全国33支部の支部長並びに事務局長ほか、出席者総数100名近くが参加する大きな集まりとなった。台風24号の日本列島縦断予想により進行を前倒しにして早めたものの、当初の議題をすべて消化できた会議となった。

冒頭の小林会長の挨拶では、昨年度の本会財政がわずかながら黒字に転じたものの、依然として予算を許さない状況にあり、今後も会員増強を軸に中長期的な財政基盤を確立するとともに、安全登山への体制強化と、そのための指導者養成の重要性について方針が示された。

〈公務報告〉

◆記念事業委員会報告…創立120周年を迎えるにあたり、実施する各種事業とその部門の編成について報告があった。(記念事業委員会／重廣副会長)

◆支部助成事業の経過報告…「特別事業補助金」の応募状況と審査報告。(支部事業委員会／重廣副会長)

◆登山計画書の提出状況について…依然として未提出の支部があるものの、制度が徐々に定着しつつある。(遭難対策委員会／中山副会長)

◆寄付について…7月に本会が紺綬褒章の公益団体として認定された。(佐野公益法人運営委員会委員長)

◆会計報告書および寄付金の取り扱いについて。(古川財務担当常務理事)

◆広島支部の状況について。(斎広島支部長)

◆鳥取県・大山で開催された第3回「山の日」記念全国大会の報告。(萩原「山の日」事業委員会委員長)

〈入会者の増強に向けて〉

◆各支部から支部登山教室の実施について報告があった。また、登山教室の開催が参加者のスキルアップとともに会員増強につながる事例として東海支部(高橋支部長、東京多摩支部(野口支部長)、北海道支部(藤木事務局長)より具体的な実施状況について報告があった。(重廣副会長)

〈安全登山について〉

◆遭難時における緊急連絡先の必要性和登山計画書の重要性について。(遭難対策委員会／中山副会長)

◆遭難事故における組織編成について。(重廣副会長)

◆ヒヤリハットの事例提出依頼について。(遭難対策委員会／中山副会長)

◆健康登山塾について。(根井群馬支部事務局長)

◆「包括契約制度」を利用した保険の導入について。(永田常務理事)

〈報告および連絡〉

阿部岩手支部長より地元F.M局での担当番組が会員増強につながる



100名もの出席者が集い、諸々のテーマについて報告や討議がなされた

つた事例について報告があった。

また、前田栃木支部事務局長より第35回全国支部懇談会の開催概要について連絡があった。重廣副会長より第8回支部指導者養成講習会の開催概要が説明された。飯田家族登山普及委員会委員長より「家族登山連絡会」設立について提案があった。大塚デジタル・メディア委員会より新入会員への説明用ツールとしての動画について説明があった。

REPORT

来年は還暦を迎える木暮祭

山梨支部長 深沢健三

奥秩父に多くの足跡を残し、森林と渓谷の魅力を世に出した、日本山岳会第3代会長・木暮理太郎の業績を顕彰する「木暮祭」が、今年で59回を数えた。来年は「還暦」碑を建て、管理し、顕彰を続けてきた関係者に感謝し、これまでを振り返ってみたい。

木暮碑は山梨県北杜市須玉町金山の県有林内に建てられている。建碑は1951(昭和26)年5月6日。当時の建設地は現在地より200mほど上方で、金山平から瑞牆山荘へ抜ける古い登山道沿いの自然石にレリーフが埋め込まれていた。しかし、1959(昭和34)年の台風で傾いたため、翌1960(昭和35)年10月8日、現在地に新たに建立された。

碑は大きな石の上に乘せられていて、全体の高さは約1・7m。碑面の刻まれた石は高さ約90cm、正面の幅約1・7m、厚さは10cmほど。礎石だけで重さ約2tと言われ、これを本谷川沿いから人力で引き上げた。碑の正面には30cm四

方ほどの木暮翁のレリーフが埋め込んである。レリーフの制作者は佐藤久一郎。建てたのは、碑文によれば木暮碑委員会、日本山岳会、霧の旅会、石楠花山岳会、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部、増富ラジウム峽観光協会。

碑文に「昭和二十五年五月六日木暮理太郎の遺徳を永く世に伝えるため木暮理太郎翁胸像建設委員会によって自然石を土台とした胸像が、この位置の上方二百米の地点に建設されたが、昭和三十四年の七号台風によるその付近の崩壊がはなはだしいため、この地に移して再建した」と刻んでいる(碑文の25年は26年の誤り)。

以来、10月の第3日曜日に「木暮祭」として顕彰を続け、今年で59回目となる木暮祭を10月21日に開催した。現在の関係団体は北杜市、山梨県山岳連盟、日本山岳会山梨支部、増富ラジウム温泉峽観光協会。碑前祭は午後2時から、古屋寿隆・日本山岳会山梨支部事務局長の司会でスタート。各団体の献花、献

酒の後、木暮碑委員会の北杜市役所増富支所の坂本孝典支所長に続き、地元観光協会の津金胤仁会長、山梨県山岳連盟の秋山教之会長、日本山岳会山梨支部の深沢健三支部長が挨拶した。

深沢健三・本会山梨支部長は「木暮翁とともに奥秩父に足しげく通い、多くの記録を残した人田部重治がいる。有名な西沢溪谷入り口にある田部重治文学碑前で、第1回田部祭が開かれた。文学碑は、地元の旧3富村がふるさと創生事業で建設した。しかし、長い間放置されてきた。田部祭の開催で、奥秩父の山梨県側には、ここ金山平の木暮祭、茅ヶ岳の深田久弥祭、西沢溪谷の田部祭と3つがそろったことになる。大事に継承していきたい」と述べた。

碑を囲んで記念写真を撮った後、碑から下った広場で、観光協会が準備してくれた熱々の「ほうとう」を味わった。

木暮碑は東向きに建てられている。当時の写真を見ると、周辺は草地の明るい斜面だったが、現在は大きく育った白樺林の中になったため、東へ幅10mほどの長い切り開きが造られて、金峰山に向き

合っている。

山梨支部は当日、支部山行として木暮碑の対岸にある五里山に記念登山した。第4回「やまなし登山基礎講座」の受講生を含めて9人が参加。踏み跡程度のルートと急斜面に足を取られながらも山頂を踏み、木暮祭に参加した。

なお、この木暮碑ができたのは、前述のように1951年5月6日。このとき除幕式と第1回木暮祭を開いている。その後、建立に合わせた春の碑前祭、秋の木暮祭が並行して行なわれてきたが、十数年前から秋に一本化して現在に至っている。



白樺林に囲まれた木暮碑前で、関係者一同が集い記念撮影

WORKSHOP REPORT

新宿御苑で「青いケシの世界」写真展を開催

3人でスタートした研究会

会報「山」8月号のインフォメーション欄に載せていただいた青いケシ研究会の写真展「青いケシの世界」は、10月2日～8日の間、東京・新宿御苑インフォメーションセンターのアートギャラリーにて開催され、大勢の方々がご来場くださり、好評のうちに終了しました。

青いケシ研究会は、2012年3月に行なわれた吉田外司夫氏の講演会で顔を合わせた千葉盈子さんと私が吉田氏に呼び掛けて、この3人が世話人となり5月に発足しました。

吉田外司夫氏は1984年以降、ヒマラヤ山脈と中国西部の横断山脈にまたがるシノヒマラヤ地域の植物の撮影取材を続けながら植物調査と研究に携わり、『花のヒマラヤ』『天の花回廊』『ヒマラヤ植物大図鑑』などの書籍を著わし、青いケシの新種を多数発表されています。

千葉盈子さんは、1979年に

青いケシ研究会 山下順子

ネパールのランタン谷を訪れて以来、青いケシに魅せられ、数度の写真展や写真集『青いケシの咲くところ』を出版して活動されています。

私、山下順子は、所属していた女性登山クラブ、エーデルワイスクラブの海外山行で、1991年にネパール・ゴークヨの青いケシ、メコノプシス・ホリドウラを見て以来、毎年ヒマラヤ地域に青いケシ探索の旅を続け、写真展を開催し旅の記録『風の花・青いケシ紀行』を出版しました。

青いケシの好きな人は、誰でも参加できます。青いケシの旅の報告や写真、記録を見せ合いながら、忌憚なくお話のできる会です。この呼び掛けに、それまで個人で青いケシを慈しんできた人たちが、関東はもろろん、札幌、名古屋、長野などから集まり、初回から42名の方が会員となりました。

それ以来、年4回開かれる定例会で、会員による青いケシの花旅報告や観察された青いケシの研究



「青いケシの世界」写真展の会場

報告がなされ、また、年2回ほど中国やブータンで青いケシ調査旅行を現地研究機関と共同で実施してきました。その中で青いケシの新種が多数発見されています。

青いケシは80種以上も

ところで、青いケシとはどんな花なのかご存じでしょうか？ブルポピーとも呼ばれる青いケシは平地に生えるケシではなく、高地に咲くケシの花のことで、学名をメコノプシスと言います。メコノプシスは、中国西部からヒマラヤにかけてのシノヒマラヤと呼ばれる標高3000m以上の山岳地に、今や80種以上が知られ、青



青いケシ研究会の定例会の模様

色だけでなく、紫、黄、白、ピンク、赤、暗赤色など色とりどりの花を咲かせます。透き通った青色の花を咲かせる種類が印象的で、よく知られていることから、「メコノプシス属の花」と言う代わりに「青いケシの花」と、いわば愛称で呼ばれているのです。

青いケシは19世紀の終わりごろから、ヨーロッパのキリスト教伝道者やプラント・ハンターによって標本や種子が本国にもたらされました。イギリスではその後、庭園を彩る貴重な花として青いケシ（ヒマラヤン・ブルーポピー）のブームが沸き起こり、数多くの園芸品種が作り出されました。現在で

はスコットランドのエジンバラ植物園を中心に青いケシ園芸品種の研究が行なわれ、イギリスだけでなく北欧や北米、ニュージーランドやオーストラリア、そして日本でも青いケシの園芸品種が植物園や庭園、愛好家の庭などで栽培されています。

日本で青いケシが有名になった

のは、1990年に大阪で開催された花の万博（国際花と緑の博覧会）以来のことです。花博のブータン館で「国の花」として青いケシが紹介されました。それまでは一部の登山家や研究者の間でヒマラヤに咲く幻の花、憧れの花として知られているにすぎなかったのです。

して高地に咲く青いケシを自分の目で見たいという人がヨーロッパ人にも、また旅行や写真の爆発的ブームにある中国人の間にも多くなりました。その中には、私たちが青いケシ研究会会員のようになり、多くの青いケシを見分けて観察したり、珍しい青いケシを探索したりする人も増えてきています。

世界でも初めての写真展

今回の「青いケシの世界」写真展は、青いケシ研究会の初めての公開写真展で、会員が毎年、雨期の6月から8月にかけて現地の山岳地を訪れて撮影したものです。できる限り多くの青いケシの種を集め、実物写真のないものは、標本写真で代えました。合わせて青いケシ164枚、83種の写真展示となり、現在発表されている種の90%以上が展示されました。このように多くの種が一堂に展示されたのは、日本は元より世界でも初めてのことと思われます。シノヒマラヤ高山地帯の厳しい環境に育まれた青いケシの美しさと多様性を、多くの方に知っていただきたいという願いからです。

青いケシを探索する旅は、その

花を求めることだけが目的ではなく、この花を生み育てた大自然や人々の暮らし、歴史、文化などに触れ、多くのことを再発見する旅でもあります。また、青いケシの魅力を皆さんにお伝えすることが、我が国だけではなく、異境の地の環境を大切に守り育てることにつながり、今後の青いケシ研究会活動の大きな指標になっていくことでしよう。

東京に続き来年の4月には札幌、8月には小樽での写真展開催が決まりました。今後とも青いケシ研究会の活動にご注目いただき、ご協力くださいますよう、お願い申し上げます。



ブータン・メラ地域の植物調査旅行での現地研究員と会員たち

日本の青いケシ愛好家は、ヨーロッパでの園芸関心の強さに比べて僻遠の地に咲く幻の花、憧れの花を見に行く花旅と結び付いていることが多いようです。最近では交通の発達により中国やネパール、ブータン、インドの青いケシ自生地を訪れることが容易になってきました。旅行会社のツアーに参加したり、個人旅行を手配したり



中国・四川省での植物調査旅行の様子

MOURNING

高尾の森づくりの会と河西瑛一郎さん

高尾の森づくりの会代表 吉川正幸

「日本山岳会 高尾の森づくりの会」は、景信山に近い北高尾の国有林で、2000年から19年にわたって広葉樹を植えて、森づくりを続けている。河西瑛一郎さんは、この会を創り、16年間、代表を務めた。2018年10月5日に急逝した彼は、登山者として、社会人として、さらに森づくりの指導者として、酒を愛し、77歳の生涯を終えた。今や日本で最大級の森林ボランティア団体になった高尾の森づくりの会は、森づくりだけに留まらず、学童、学生に対する自然保護教育や、八王子や三宅島の緑化など、多様な活動を展開している。

都立立川高校から慶大へ

河西さんは1940年、多摩に生まれ、高校に入って登山を始めた。8年歳上の田邊壽さん（元日本山岳会副会長、ヒマルチュリのサミッター）が、母校の都立立川高校を訪問して山岳部に、自分の後輩として慶應義塾体育会山岳部に入る者はいないか、と尋ねたと

き、「私が慶應の山岳部に行きます」とスツと手を挙げた紅顔の生徒が、河西さんだったという。

河西さんは、1959年4月に慶大山岳部に入部したものの、前年12月に中岳で4人を失った遭難事故の直後だった故に、基礎から登山をやり直すという部の方針により、少人数による小さな登山を繰り返すことになったという。1962年度のチーフリーダーとなった河西さんは、年度の山行を振り返って、「中岳遭難後、ヤブ山から始めた山登りが冬の北アルプスの稜線を歩けるようになった。冬山は剣岳、槍ヶ岳、北岳の3隊が出かけた。雷鳥沢で事故につながりかねない雪崩を起こし、目標にできた山登りが十分に身に付いていなかったと知った」と、自賛と反省を記している。1964年に大学を卒業した河西さんは、毎日新聞社営業部に就職した。同社は日本山岳会マナスル登山隊のスポンサーでもあり、ヒマラヤ登山を期するところがあつたのではない

か。しかし、諸事情から彼はその機会を得ることはなかった。

新聞社勤務を25

年続けた後、系列の外資系新聞社の日本社長になった前後から、チベットの旅行を繰り返し、2004年には北米マツ

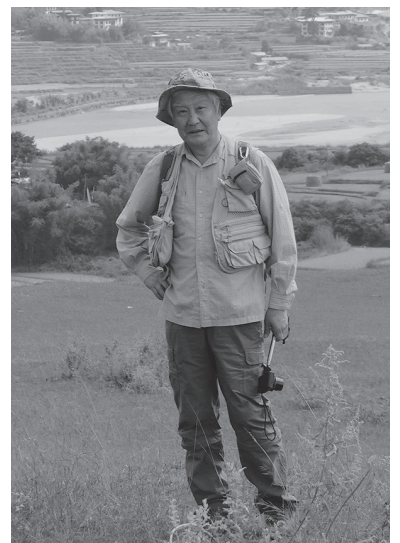
キンリーに登頂し、05年5月に、64歳で登高会のチベットのカルシ

ン(6674m)登山隊に参加して初登頂している。

2001年に森づくりの会発足

河西さんは2000年当時、日本山岳会の自然保護委員会担当理事であり、会員外構成員も含めた「山の自然学研究会」の会員でもあった。こうした自然保護に関心の深い仲間である大蔵喜福、山川陽一、藤川裕子、西村智磨子、川越尚子、篠崎仁、伊藤敏などの各会員と河西さんが発起人になって、2001年の年初に高尾の森づくりの会が発足した。

創設15年後の河西さんの回顧によれば、1999年に、山に育ててもらった恩返しとして、森づく



ありし日の河西瑛一郎さん。ブータンにて(2012年11月)

りをやろうと思い立ったという。「林野庁OBの龍久仁人会員(後の事務局長)がいて、林野庁の国有林に民間の活力を導入する政策や、林業を知ってもらうために森林ボランティアを組織しようとする動きがあることを聞いた。それと噛み合って話ほとんどん拍子に進んだ。結局、日本山岳会と林野庁(東京神奈川森林管理署)とで協定を結び、高尾山の北側の国有林を借りて、森づくりを行なうことになった。そこは風景林とはいえ、杉、檜が8割の手入れの行き届いていない人工林で、いろいろ問題がある急斜面の山であつた。杉、檜を間伐して、広葉樹を植えている。ナラ、カツラ、ヤマザクラなどを植えて、50年かけて、針葉樹と広葉樹を半々にしていこうというのが



初年度植栽地の現在の様子

大きな目標だった」と語っている。当初は少数で発足したものの、森づくりのボランティアを募集したところ、1年後には、会員は約230人となり、その時点で日本山岳会会員以外の会員が半数を超えた。国土緑化推進機構からの助成金も得て、森づくりの道具類も充実し、2001年4月に開催された第1回の植樹祭には、300名を超える参加者を得たという。2000年から01年にかけて、初めて植樹した地域(0.8ha)には1000本が植えられ、ヤマザクラやカツラ、トチノキ、ホウノキなどが、18年を経て立派な広葉樹林に成長している。

小下沢にベース小屋を建設

06年には、森林管理局の許可を得て小下沢奥の広場に作業小屋を建設した。土台こそ専門家に委ねたものの、上屋は多彩な技能を持った会員による手作りである。のちに河西さんは、日本山岳会の全国土支部長会議の席で、「登山の会であれ、森づくりの会であれ、一つの方向性を持った集団は、宗教のようなものである。宗教にはその集団の拠り所としての寺院や教会が必要である。故に高尾の森づくりの会では、ベース小屋を持つに至った。発展のためには拠点といる。事実、ここを拠点として、間伐材を利用した木工工作を行なう「ものづくり班」や、チェーンソーの研修班なども結成されて、会員の拠り所となっている。

多彩なプログラムを展開

初期から地元の企業が法人会員となつて会を支援した。法人会員の社員は、森の定例作業に参加するだけでなく、協力して新しい自然保護教育などの企画を行なうようになった。例えば京王電鉄株とは、共同で親子森林体験スクールを今日に至るまで毎年、開催して

いる。また、小学校の生徒や専門学校の学生を対象として、森林体験のキャンプやハイキングを毎年行なうようになった。

2011年3月11日の東日本大震災の直後に、気仙沼にボランティアとして駆け付けた会員が、災害の跡片付けにチェーンソーや伐採作業などが必要と考え、広く会員に支援を呼び掛けた。その結果、多くの会員が参加して16年まで11回もの気仙沼大島震災復興プロジェクトを続け、会は気仙沼大島町から表彰を受けた。さらに国土緑化推進機構からの助成金を得て行なった三宅島緑化再生プロジェクトは、今日に至るまで21回を重ねている。また、同助成金により、ラオス展示林造成プロジェクトを17年まで6回にわたって行ない、多数の会員が参加した。

夢は明るい広葉樹の森に

高尾の森づくりの会は順調に発展してきたが、会の運営や組織管理に関しては、決してそうではなかった。自然保護や安全管理に関して理想を追う幹部と、現実的な解決を模索する会の代表としての河西さんとの相克があり、また、反対に理想を失いがちな幹部との衝

突があり、会を去った会員もいた。会の運営に関して、河西さんの苦労は並々ならぬものがあつたと想像できる。その苦勞を見せずに明るく振る舞った河西さんがいて、高尾の森づくりの会が維持できてきたと言える。河西さんは、赤いボルシエを乗り回しても照れることのない男で、威あつて猛からず、とは彼のことであつた。

河西さんの夢は、高尾の森づくりの会の夢でもある。すなわち、春には桜が咲き、秋には紅葉に彩られる、明るい広葉樹の森を築くことである。そこへの道はまだ遠いが、高尾の森づくりの会の仲間とともに夢を追っていききたい。



会員の拠り所となっている小下沢ベース小屋

N 東 西 南 北 S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

『山岳』第百十三年の

「伊藤孝一伝」を読んで

五十嶋一晃

『山岳』第百十三年の「読物」「黒部の山河と人を愛した伊藤孝一伝」を関心を持って読んだ。

執筆者の郷土を慕う心情がよく表われており、あまり知られていない同郷の人の業績を、記録として留めておきたいという気持ちはよく理解できる。

日本山岳会会員（大正8年、規則改定までは特別会員）伊藤孝一とその一行による雪の薬師岳初登頂や黒部川源流域の初踏破、槍ヶ岳への初縦走というパイオニア・ワークと、その準備段階を含めた全行程の撮影および雪の北アルプスのパノラマを存分に写し取った業績は、日本の近代登山史上に燦然と輝く登山として、高く評価す

べきであると考ええる。

ただし、『山岳』の61ページ下段に「この画期的な登山記録にもかかわらず、当時の日本山岳会からは無視された。——その背景は大正12年1月、板倉勝宣、三田幸夫とともに積雪期の立山へ登山、下山中に松尾峠で板倉が遭難死したこと起因する。同僚を亡くし、自身も遭難した横有恒への配慮とも言う。——平成元年（1989）年の、横有恒の死去を待つしかなかったのだろう」と記述されていることには、疑問を禁じ得ない。

根拠の一つとして安川茂雄著『近代日本登山史』（1969年刊）には伊藤の記録の記載がない、とあるが、安川登山史が発行された6月30日直前の6月13日に、山崎安治著『日本登山史』が発行されており、それには大正12年3月の伊藤一行の針ノ木峠越えが1行、

雪の薬師・槍越えは、ヨーロッパから「岩登り」などの映画を取り寄せたことを含めて12行も載っている。

「この冷遇に嫌気して赤沼ともども戦前のうちに退会している」とあるが、伊藤孝一は弟とともに大正5年入会、昭和7年に退会しているが、伊藤は昭和6年に国と係争中であつた税金問題で敗訴し、経営していた伊藤殖産は破産の憂き目を見たために退会した、と私は捉えている。

伊藤の山の盟友で、伊藤登山に同行している百瀬慎太郎、赤沼千尋は、昭和15年ごろ（記録保存に不備あり）に退会している。登山者が極端に少なくなり始め、登山関連業が覚束なくなつたところである。したがって、3者とも画期的な登山記録にもかかわらず、日本山岳会からは無視されたことが要因で退会したとは考え難い。

伊藤登山が日本登山史に記されなかつたのは、伊藤自身が登山記を全く発表しなかつたことに起因している、と私は解している。文字での発表はなく、「雪の薬師、槍越え」に至っては、撮影したフィルムが自宅や、戦争末期から戦後は

赤沼家分家の土蔵に置かれたままであつた。平成12年春に立山博物館は、亀山清一（伊藤隊記録担当）と伊藤の日誌に基づいて、日本山岳会資料・映像委員会の羽田栄治が編集を担当し、作品化している状態である。

登山におけるパイオニア・ワークとは、計画から登山記の発表までが登山の範疇である、と私は捉えている。伊藤登山に不正確な情報が多かつた要因は、伊藤自身から登山記の発表がないことによつて、小説に描かれている虚構部分を真実と捉えている人がいること、不的確な推測がいくつも伝えられていること、伊藤登山の現地を知悉していない、または調査不足であるにもかかわらず伊藤登山が語られていたこと、大正末期を現在に置き換えた場合の受け止め方の相違などによつて、ますます事実とかけ離れ、虚構が増幅している。

現在、私は伊藤登山を総合的に究明し、その深奥に迫るために調査・執筆中である。



寄付金及び助成金などの受入報告(平成30年9月30日まで)

寄付者など	受入金額など (単位千円)	寄付の目的、その他
株式会社アーバン	100	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
伊藤ハム株式会社	50	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
アサヒビール株式会社	100	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
コニカミノルタ株式会社	200	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
富士電機株式会社	50	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
メタウォーター株式会社	50	日本山岳会 高尾の森づくりの会運営
山崎 喜春 様	6	視覚しょうがい者 登山全国大会
株式会社センコー技研 代表取締役 竹中 佳美 様	100	岐阜支部が行う県有林整備事業・登山振興事業への活動援助
松川 征夫 会員	10	視覚しょうがい者 登山全国大会
日本山岳会東九州支部	2	山のマナーノート
東海大学山岳部OB会	118	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
日向 祥剛 会員	300	「北九州支部ルーム」の運営資金の一部として
深川 安明 会員	60	視覚しょうがい者 登山全国大会
西川 瑛一郎 様	10	視覚しょうがい者 登山全国大会
一般社団法人 獣害対策支援センター	30	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
江川 知史 会員	10	視覚しょうがい者 登山全国大会
森 武昭 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
三宅 悠介 様	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
智和 譲 様	2	山のマナーノート
日本山岳会東京多摩支部	1	山のマナーノート
安井 康夫 会員	10	日本山岳会青年部チャムラン登山隊2018への支援
東 政孝 会員	300	Youthclub 運営費用

「裏剣山行」初参加です！

山行委員会



報

告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です。

今年、日本山岳会(ユース)に入会させていただき、8月27～31日に行なわれた山行委員会主催の北アルプス裏剣山行が初めての参加だった(1日目Ⅱ室堂～剣沢小屋

2日目Ⅱ～池ノ平小屋 3日目Ⅱ～阿曾原小屋 4日目Ⅱ～樺平(天気は、ほぼ雨なし豪雨)。
15名のメンバー表を確認してみたところ、大先輩の方々ばかりで、「場違いだったかな。浮かないかな」と思わずにはいられなかった。そして、東京から室堂行き深夜バ

ス出発時には豪雨と雷、一抹の不安を抱いたのだった。とりあえず乗車したところ10名ほどの乗客。さらなる不安が募ったが、仕事帰りということもあって眠気が勝ち、気が付けば室堂に到着していた。寝ぼけながらバスを降りると、視界はゼロ。あたりは真っ白。本当に山行は決行されるのだろうか。もしかして中止連絡を見逃したかも……。などなど、さらにさらに不安が押し寄せてきた。一人室堂の待合室で不安に苛まれていると、一人の女性が話しかけてくれた。「もしかして竹内さんですか？ 北

アルプスに参加する〇〇です」そのときのうれしかったこと！(お声を掛けていただきありがとうございます)。こんな豪雨だと中止になりそうなものだが、その選択肢はないようで、当たり前のように決行する日本山岳会にまず驚き。

歩き出すと、皆さん雨をものともせずしっかりと足取りで登られ、さすがだなと感じた。その後の4日間を2緒させていただき、毎日酒盛りで7名の女性全員と仲良くなった。心配していた浮き感もなく、男性の方には歩き方



長次郎谷出合の雪渓上にて。前列、旗の後ろ(左)が筆者

などを教えていただいた。ストックを持ってきておらず、おぼつかない私の足取りを見かねて「1本あげるわ」(いただいてしまいません!)。また、食料も「何も持っていないんやろ」とお菓子をくださった。「水はあるの? 大丈夫? 」と気に掛けていただき、ありがたかった。豪雨と雷でずぶぬれになりながら歩き続け、これは修行なのかと愚痴を言いたくなるほどだった。下山したときには身体が冷えまくっていたが、仲間の方々の親切で心は温かった。

あと、驚いたことは、各山小屋の管理人さんたちが、どこも山小屋

の前で待っておられ、大歓迎してくださったこと。待遇が良く、過ごしやすく、これが日本山岳会のネームバリユーなのかと、改めて知ることができた。時間制限のあるなか、3人のメンバーだけで池ノ平山を登頂できたのも、良い思い出になった。皆さん、本当にありがとうございました。

(ユースワングル・竹内美春)

今回は一帯の山小屋に日本山岳会が15名で裏剣に入るというお触れが回っており、どこの山小屋も事前の草刈り、ピンクテープなど実にしつかり整備をしていた。サービスも万全で、悪天ながら実に楽しく歩くことができた。各山小屋の皆さんに心から感謝申し上げます。

(山行委員会)

支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

東九州支部 第17回青少年体験登山

「青少年体験登山大会」と銘打ち、青少年に限らず広く一般初心者を対象にして実施する登山教室は、今年で17回目を迎える。今回は例年になく参加申込みが多く、期限までに121名の申し込みがあった。さらにバスの定員にあふれたキャンセル待ちが9人も出るあり

さまたった。ところが、秋雨前線の影響で当日の天気予報が雨と分かった2日前から、参加のキャンセルが相次ぐ状況となった。

9月9日(日)、当日は予報どおり早朝から小雨模様で、大分駅からのバス利用者は予定の51名から大きく割り込んで35名、牧ノ戸峠の現地集合の参加者もつと減って、45名の参加予定が集まったのは9名である。しかし当初、121名



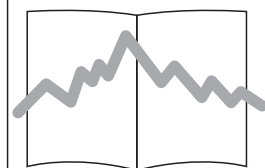
出発前にレストハウス前で

をエスコートしながら登るため動員した支部会員は全員勢揃いで、バスが到着すると総勢69名とほぼ例年に近い参加者数であった。峠の登山口は小雨が降り続き、周りは濃い霧で覆われたまま。好天のこの時期の日曜日なら、駐車場は超満員で、朝からひっきりなしに登山口から入る登山者の列が続くが、さしもの天気で駐車場はがら空き。登山口のゲートから入る人影はほとんど見当たらない。出発の時刻は午前9時、しかしちよつと様子を見ようということになり、50分ほど待つが小雨と霧の天候は一向に変わりそうにない。予定の久住山頂へのルートは、雨

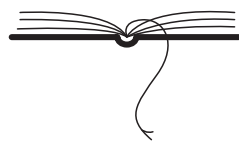
天で初心者の団体には安全でないと判断し、獺師岳へとルート変更。この山は草原状の緩やかな稜線歩きで、雨天でも危険な箇所はなく、好天なら軽いハイキング気分で登れるエリアである。

牧ノ戸峠登山口から車道を900mほど行った所にある獺師岳の登山口から、健脚組、元氣組、そして人数の多いのんびり組は4班に分かれて登山開始。雨に煙る草原の稜線に長い一列の隊列が続く。山頂まで約50分。先に着いた組は先頭から順次下山で、最後ののんびり組を除いてほかの先発隊は途中から合頭山へ寄り道。牧ノ戸峠登山口に全員揃って解散式を行なったのは12時30分過ぎであった。参加予定者は6歳から84歳まであったが、この日の参加者は、7歳から76歳まで。小学生と高校生にはささやかな記念品の贈呈。あいにくの雨天で易しい山道歩きに変更し、高校生にはやや物足りない様子も見られたが、ほとんどの参加者から、雨中の山歩きの面白さなどを体験できた、と満足げな答えが返ってきた。

(飯田勝之)

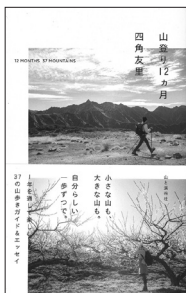


図書紹介



四角友里著

山登り12カ月



2018年6月
山溪谷社 168頁
A5判 1500円＋税

本書は1年12ヶ月、どの月にとの山をのんびり歩いたらよいのか書かれている。つまり、著者が実際に歩いた体験に基づいた山で季節を楽しむガイドブックである。まず、本を開いてみると四季折々の写真とともにルート図が飛び込んできく。もちろん、この視覚的情報のみで実際に歩いてみるのもよいだろう。しかし、それぞれのルートについて著者が記すコラムでは、山を歩く経緯、自然に対する感情、歩いたときに出会った人々、頬張ったグルメの感想などともに語られる個性豊かな体験が

とても繊細で、柔らかで、可愛らしい。「この山でこういう楽しみ方もあり」と共感を覚える。

著者の四角友里氏は、「山ガールブーム」の火付け役で「山スカウト」を広めた。そして、ファッショニ性を重視するアウトドア派の女性たちが各地の山に押し寄せた。

平成30年度（後期） 「海外登山助成対象登山計画」募集

海外登山助成対象登山隊審査委員会

公益社団法人日本山岳会では登山界の活性化を目指し、優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。第40回目となる今回も、困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢多い計画など、ユニークな登山計画を支援したいと考えています。会員資格やパーティ編成等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

記

- 対象 2019年2月～2019年7月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込み方法 所定の様式（事務局にご請求ください）に記入し、登山計画書（15通）を添えて申請してください。
- 申込み締切 2019年1月10日
- 審査と助成期間 2019年2月中に審査し、理事会で決定、助成。なお、助成対象となった登山隊は後日、報告書の提出を必ずお願いします。JAC会報「山」に掲載します。
- 問合せ・申込み先 日本山岳会事務局
電話 03-3261-4433

2010年8月3日の山梨日日新聞の記事によれば、山ガールたちが富士山に1ヶ月で10万人も登ったという。四角氏は講演や執筆活動を通して山歩き魅力を伝えつつ、アウトドア・ウェアやギアの企画開発に関わるアウトドアスタイル・クリエーターである。

本書で紹介されたルートのうち、「みちのく潮風トレイル」「京都一周トレイル」「唐津オルレ」が異色である。これらはタイトルからではどの山を対象にしているのかわからない。山を歩いたというより、取り巻く自然環境や歴史、人々に

著者独特の感受性で心を寄せている。特に、著者の中で漠然としていた東日本大震災への思いが、みちのく潮風トレイルを通じて具現化されようとしている。

また、著者は槍ヶ岳の肩まで行きながら、槍ヶ岳登頂はしていない。道中、壮大な自然の一部である槍ヶ岳の姿を様々な角度や距離で十分に見てきたからか、「ここまで来て（槍ヶ岳山頂に登らないのは）もったいない最高のぜいたく」を体験。

森を構成する草木の匂いをかぎ、小さな小さな花に目を留め、落ち

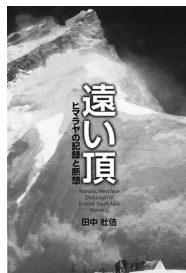
た葉や実の一つ一つを手に取り、雪上の足跡から動物について想像する……。著者の山歩きスタイルを一度真似してみたいと思う。もちろん、下山後の温泉やグルメも大きな楽しみとして。

（加藤真美）

田中壯佑著

遠い頂

—ヒマラヤの記録と断想—



2018年8月
上毛新聞社
A5判 359頁
非売品

2017年9月に亡くなられた、群馬支部前支部長・田中壯佑氏の遺稿集が『遠い頂 ヒマラヤの記録と断想』として、2018年8月末の一周忌に合わせ出版された。

田中氏の業績や人柄などについては会報「山」や『山岳』に述べられているのでここでは割愛させていただきますが、本書からはまさにその業績や人柄が生きて伝わってくる。それもそのはずで、1970年代、若き日の著者がマナスル西壁、ダウラギリIV峰、エベレ

スト、そして再びマナスルへと、4度にわたって参加したヒマラヤ遠征を、自らの日記や婚約者・妻への手紙として克明に記しているからだ。

田中氏は自らの癌と向き合いつつ、当時書かれたこれらの文章をパソコンに入力し、原稿として残してくれていた。ほかの文章も何篇か拾い、関係の深かった方々に追悼文も寄せてもらい、でき上がったのがこの本だ。『遠い頂』は4度目のヒマラヤとなった78年のマナスル遠征時の日記に、今までのことを本にしたい、タイトルは「遠い頂」と記されていたことから、この書名とした。

ヒマラヤ登攀史としても、キャラバンから克明に記録した興味深い内容であり、また、若き日の山への情熱、愛する人への思いなど、青春の薫りが漂ってくる懐かしさを感じる。

本書は私家版で非売品だが、希望者は発行者の田中千枝子夫人（〒370-0844 高崎市和田多中町11-31）まで。また、群馬支部事務局でも問合せにお答えする。

（根井康雄）

図書受入報告(2018年9月～10月)

著 者	書 名	頁/サイズ	発 行 者	発行年	寄贈/購入別
廣江研 原作/岩田廉太郎	我が友 植村直己(漫画) : 厳冬のマッキンリーに消えた友	164p/21cm	立花書院	2018	著者寄贈
田中壮佑(著)「遠い頂」刊行委員会(編)	遠い頂 : ヒマラヤの記録と断想	360p/21cm	田中千枝子(私家版)	2018	発行者寄贈
バミール・中央アジア研究会(編)	新世紀の中央アジア : バミール・中央アジア研究会 PCAS会報No.7	79p/26cm	バミール・中央アジア研究会	2006	発行者寄贈
C.フライ(著)甲斐理恵子(訳)	世界植物探検の歴史 : 地球を駆けたプラント・ハンターたち	163p/26cm	原書房	2018	出版社寄贈
下嶋溪・松本大	ランニング登山(絶版新書) : もうひとつの山登りの刺激的世界	144p/19cm	ソーシャルキャピタル	2018	出版社寄贈
橋尾歌子	それいけ避難小屋 : 51軒収録 イラスト全図解!	215p/21cm	山と溪谷社	2018	出版社寄贈
西野淑子	もっとゆるい山歩き : いつだって山日和	128p/19cm	東京新聞	2018	出版社寄贈
金田正樹・伊藤岳	図解 山の救急法 : 医学的根拠から応急処置法まで	112p/26cm	東京新聞	2018	出版社寄贈
木原均	一粒舎主人 写真譜	256p/24cm	木原生物学研究所	1985	会員寄贈
馬場勝嘉(編著)	ヒマラヤクロニクル 1	238p/26cm	馬場勝嘉(私家版)	2018	編者寄贈
高澤光雄	山旅句 随筆集(道文庫 No.196)	231p/19cm	北海道出版企画センター	2018	著者寄贈
ウインター・クライマーズ・ミーティング(編)菊地敏之(編)	冬期クライミング(新版) /クライミング・ガイドボックス	200p/21cm	白山書房	2018	出版社寄贈
平井一正	AACK人物抄	109p/21cm	私家版(平井一正)	2018	著者寄贈
Isaac, Sean (ed.)	The Canadian Alpine Journal 2018 (Vol.101)	200p/24cm	ACC	2018	発行者寄贈
MacDonald, Dougald (ed.)	The American Alpine Journal 2018 (Vol.60 Iss.92)	384p/23cm	AAC Press	2018	発行者寄贈
Purandare, Nandini (ed.)	The Himalayan Journal 2018 (Vol.73)	356p/22cm	Himalayan Club Centre	2018	発行者寄贈
Searle, Mike	Colliding Continents : A Geological Exploration of the Himalaya, Karakoram, & Tibet	438p/26cm	Oxford Univ. Press	2013	購入

会務報告

平成30年度第6回(10月度)理事会 議事録

日時 平成30年10月10日(水)19時05分～20時40分

場所 集会室

【出席者】 小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・谷内各常務理事、安井・清登・齋藤・星・波多野各理事、平井・石川各監事(所用のため星理事は業務執行報告1まで欠席)

【欠席者】 古川常務理事、近藤理事
【オブザーバー】 節田会報編集人

【審議事項】

1・平成30年度(第20回)秩父宮記念山岳賞について

秩父宮記念山岳賞審査委員会より推薦された平成30年度(第20回)秩父宮記念山岳賞候補者について審議した。(賛成11名、反対なしで承認)

2・規程類管理規程(C-1)の改定について

規程類の作成および改定時における公益法人運営委員会での確認手続きを明文化し、管理責任者を総務担当理事より公益法人運営担当理事へ移管するために、規程類管理規程(C-1)を改定することについて審議した。(賛成11名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・理事の定年および再任の制限について協議した。(小林)

2・名誉会員の推薦について協議した。(谷内)

【報告事項】

1・入会希望者6名、準会員入会希望者4名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)
2・寄付金22件の受領について報告があった。(永田)

3・税額控除に関する証明申請について報告があった。(永田)

4・支部登山教室アンケートの結果について報告があった。(重廣)

5・登山計画書の提出状況について報告があった。(中山)

6・上高地山岳研究所工事の状況について報告があった。(安井)

7・「山」10月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1・医療委員会講演会について(齋藤)

2・マンション理事会への出席報告(永田)

3・第34回宮崎ウェストン祭並びに記念登山について(永田)

【今後の予定】

1・常務理事会・理事会

・平成30年度11月度常務理事会

11月8日(木)18時30分 集会室

・平成30年度11月度理事会

11月14日(水)19時00分 集会室

2・各種会議等

・平成30年度支部連絡会議

12月1日(土)10時30分～12時00分

・平成30年度年次晩餐会

12月1日(土)12時30分 受付開始

18時00分 開会

ルーム日誌 10月

1日 評議員懇談会 総務委員会
2日 常務理事会 スケッチクラブ

3日 図書委員会 山行委員会
4日 バックカントリークラブ
5日 YOUTH CLUB スキークラブ

9日 資料映像委員会 山岳研究所運営委員会 フォトクラブ スケッチクラブ

10日 理事会 休山会 山想倶楽部

11日 記念事業委員会 二火会
山岳地理クラブ 九五会

12日 支部事業委員会 会報編集委員会

16日 総務委員会 自然保護委員会 スキークラブ

17日 YOUTH CLUB 三水会 つくも会

18日 資料映像委員会 科学委員会 みのり山の会

19日 YOUTH CLUB 山の自然学研究会

22日 公益法人運営委員会 資料映像委員会 会報編集委員会

員会 フォトクラブ

23日 デジタルメディア委員会

遭難対策委員会 平日クラブ

24日 家族登山普及委員会 麗山会

25日 学生会 山遊会 01会 緑爽会

26日 総務委員会 科学委員会

29日 青年部 緑爽会

30日 里山歴史研究会

31日 自然保護委員会 YOUT H CLUB

10月来室者 495名

会員異動

物故

関口 敏 (3506) 18・9・20

松田雄一 (4111) 18・10・1

河西瑛一郎 (4502) 18・10・5

赤松功也 (5378) 18・10・11

「優待サービス一覧」の追加

〈会員サービスWG〉

*【四国】石鎚山白石旅館／
宿泊料金の5%引き／

①0897159-0032／

②前記に同じ

佐藤はまゑ(6541) 18・6・8
三澤日出夫(8158) 18・10・20
遁所彊二(10582) 18・9・9

退会

久下啓子(8819)

菅原富喜(11348) 山形

野間 弘(12662) 広島

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆第35回全国支部懇談会のご案内

主催 栃木支部

越後、茨城、北海道と続いている全国支部懇談会を来年(2019年)5月に栃木県日光で開催します。新緑の奥日光でお待ちしております。

日程 5月25日(土)～26日(日)

宿泊 奥日光・光徳温泉 日光ア

ストリアホテル

受付 〈集合場所〉25日12時 中

禅寺湖畔日光自然博物館

参加費用 2万円(宿泊・懇親会

費用、お弁当等含む)

熊岡達雄(14124) 静岡

岩見 宏(14363) 広島

松浦朋宏(15123) 広島

広島大学探検部(15426) 広島

萬屋貴子(15519) 埼玉

勇 正史(15986) 広島

森あかり(16046) 東海

申込み期間 12月15日(土)～1月31

日(木) 支部単位で申込みを

お願いします。内容など詳細

は栃木支部HPへ

<http://www.jac.or.jp/tcg/>

問合せ 上田景子 TEL 080-5

388-2227



◆編集後記◆

●「……昨日はボンジュネ、今日またアジャラ……」〔存じ〕「シーハイ」の歌ですが、学生時代、この2つの地名らしき言葉がとても不思議な語感で、気になっていました。「あれはボンジュールとアデュー。フランス語だ」と山岳部のアホな先輩が解説してくれましたが、後日、梵珠嶺(468m)と阿闍羅山(709m)と分かりました。

●10月下旬は、太宰治の故郷、金木町の斜陽館で開かれたフォーラムに参加したのち、「奥津軽トレイル」を少し歩いてきました。永年気になっていた梵珠山を山麓から眺めることもできましたし、津軽弁や津軽三味線の響き、青森ヒバの香り、そして五所川原立佞武多の立派さなど、晩秋に相應しい味わい深い旅でした。(節田重節)

日本山岳会会報 山 881号

2018年(平成30年)10月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社